

東京音楽大学附属民族音楽研究所刊行物リポジトリ

Title	アジアの発掘口琴チェックリスト (7) : 薄板状の口琴 (6)
Title in another language	Asian Excavated Jew's Harps: A Checklist (7) – Lamellate Harps (6)
Author(s)	直川礼緒 (TADAGAWA Leo)
Citation	伝統と創造=Dento to Sozo, Vol. 12, p. 41-54
Date of issue	2022-03-30
ISSN & ISSN-L	Print edition: ISSN 2189-2350, Online edition: ISSN 2189-2482, ISSN-L 2189-2350
URL	https://tcm-minken.jp/publication/IE_B12202204.pdf

アジアの発掘口琴チェックリスト(7): 薄板状の口琴(6) Asian Excavated Jew's Harps: A Checklist (7) – Lamellate Harps (6)

直川礼緒 TADAGAWA Leo

ユーラシア大陸を中心に世界中に分布する、始原的な楽器である口琴は、いつごろ、どこで、どのように生まれ、どのように広まっていったのだろうか。これまで「アジアの発掘口琴チェックリスト」では、6回に渡りアジアとその近接周辺地域で発掘された口琴の確認を行ってきた。

本稿では、その第7回目として、これまで取り扱ってきた出土口琴の中でも、薄板状の口琴に関して、補遺と訂正を行う。新たに見つかった出土例をいくつか補足するほか、ロシア連邦カマ川流域の口琴については、個々の発掘例の情報を記述し、図版を補足すると同時に、引き紐用の穴のある数例の取り扱いを変更する。また、各楽器の採寸を改めて見直すこととする。

キーワード: 口琴 Jew's harp、音楽考古学 Music archaeology、
古代楽器 Ancient musical instruments、北方アジア Northern Asia

1a. 中国内蒙古自治区 Inner Mongolia, China [01] (補遺)

紀元前8～4世紀のものとされる、中国内蒙古自治区赤峰市の夏家店上層文化の遺跡の骨製の薄板状の口琴 [01] (直川 2016: 58-60) であるが、厚みの表現を含めて実測図 (中国科学院考古研究所内蒙古工作队 1974: 140) を再計測した結果、全長 98mm、最大幅 (弁の付け根側) 約 16.6mm、最小幅 (弁の先端側) 約 7.9mm、厚さ約 0.9mm と訂正する。

3a. モンゴル Mongolia [06] (補遺)

紀元前3～1世紀のモリントルゴイ遺跡出土の骨製の薄板状の口琴 [06] (直川 2016: 61-62) の参考文献 (同: 70) を、下記に訂正する (Хунну > Хүннү)。

Цэвээндорж, Дамдинсүрэн.

1990 Морин толгойн булшнаас олдсон «Хүннү хэл хуур». Шинжлэх Ухааны Академиин Мэдээ. no. 3. p. 72-81.

4a. ロシア連邦トゥヴァ共和国 Tyva Republic, Russia [07] (補遺)

紀元後2世紀のアイムイルルィグ XXXI 古墳出土の骨製の薄板状の口琴 [07] (直川 2016: 62-63) のサイズを、サンクト-ペテルブルグのエルミタージュ美術館の協力のもと

と、2017年9月14日から翌2018年1月14日の間、大英帝国博物館で開催された特別展「Scythians: Warriors of Ancient Siberia (スキタイ人：古代シベリアの戦士)」の図録に掲載された、大きく(全長約24cm)引き伸ばされた写真(Simpson, Pankova, (ed.) 2017: 340)を、記載のある全長(103mm)をもとに新たに計測し、最大幅約14.8mm、最小幅約6.5mmとする(厚さの手掛かりは無い)。なお、この楽器を1980年に発掘したのがスタンブルニクであることも付け加えておく。

6a. ロシア連邦ヤマロ-ネネツ自治管区 Yamalo-Nenets Autonomous Okrug, Russia [10, 11] (補遺)

2000年以前に発掘されたウスチ-ヴォイカル土壘出土の骨製の薄板状の口琴[10]については、すでに写真を掲載し、ある程度の情報の記述を行なった(直川2016: 64-65)が、同遺跡から2003～2004年の調査で「多数」発掘されているとされる18～19世紀の骨製の薄板状の口琴については、その本数、写真、所蔵先、調査記録などが未確認であったため、[11]の仮番号を振るにとどめた(同: 65)。そのうちの1本と思われるものがインターネット上で見つかったので、[11]に相当するもの(のひとつ)としてここに記しておく。

サンクト-ペテルブルグの“Град Петров”(ピョートルの街)というFMラジオ局のサイトに、オムスク州立美術館で2018年8月14日から9月30日まで開催された「Иртыш течет на север(イルトイシ川は北へ流れる)」という特別展の紹介番組(2018年9月12日放送)と、その文字化がアップロードされている。展示会場の様子の写真も多数掲載されており、展示品を写した数葉の中に、破損した口琴の杵が一点確認できる(fig. 89)。その解説パネルは残念ながら全体が写っておらず、「楽器-口琴」であること以外は、はっきりとわからない。しかしながら、2行目にある年代表記の上半分程度の文字の様子が、口琴の左右にあるマンモスの牙製の「匙」や、骨製の騎乗人物の人形と同様で、おそらく同じ出自のものであると考えられ得る。そうだとすれば、紀元後4～9世紀のもので、ヤマロ-ネネツ自治管区シュルシカル地区のヴォイカルソル Войкарский Сор という湖のそばにあるウスチ-ヴォイカル土壘で発掘されたものである。

写真を見る限り、全体の形状は、同じウスチ-ヴォイカル土壘出土の[10]とよく似ており、長方形や等脚台形ではなく、弁の付け根側で幅広く、全長の中央あたりから曲線を描いて、弁の先端側の狭い端に至る、一升瓶などの「ボトルのシルエット」型。杵の一部は、破損し、失われている。振動弁も失われているが、杵の内側の形を観察することにより、弁の形状が、先端が細い、直角の「肩」のある、縦長の「凸」形であったことが明瞭に見て取れる。弁と杵の一部が失われていることにより、引き紐がどの位置にとりつけられていたのかは不明だが、[10]および民族例の多くを含むこのタイプの他の多くの口琴と同様、振動弁に(杵にではなく)紐がつけられていた可能性が高い。サイズに関する手掛かりは皆無だが、[10]と同じ約

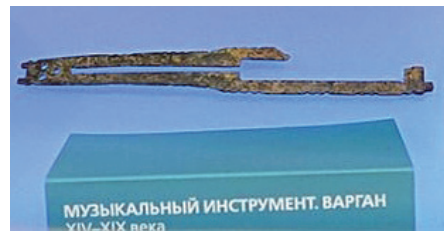


fig. 89 ロシア連邦ヤマロ-ネネツ自治管区、ウスチ-ヴォイカル土壘出土の口琴[11]。ステパーノヴァ 2018より。図版はオリジナルのまま、180度回転させてはいない。

120～130mm 程度だろうか。弁の先端側に、小さな穴が3つ開いているように見える。「弁に付けられた紐を引く力に対抗して、楽器を保持するための持ち手の紐」を通す目的の他、装飾の意味もあるのだろうか。

「肩」のある弁を持つ口琴の発掘例は非常に少なく、存在が確認されたのは、[10]に続きこれで二例目となる。これにより、このタイプの口琴が、ある程度同地域で一般的だったものであり、また登場した時期が「肩」のない弁を持つ口琴に比べて遅い、という証拠になり得るだろう。なお、年代に関しては、直川 2016: 65 で [11] の仮番号を与えた口琴（群）は「紀元後 18～19 世紀の層」から発掘された、とされているので、本稿で [11] とした紀元後 4～9 世紀とされるものが、本当に同一の遺物（の一部）かどうか、という点も確認が必要である¹³⁴。

その所蔵は、ヤマロ - ネネツ自治管区チュメニ州の首都サレハルドにあるヤマロ - ネネツ自治管区博物館・展示施設となっているので、いつか機会を見て、現物の熟覧・計測をし、記録があればその内容を見て推定年代を確認したい。また、他にどのような資料が何本発掘されているのかも調査したい。

7b. 中国遼寧省 Liaoning, China [12, 13, 84, 85]（補遺）

紀元前 16～10 世紀のものと考えられる、中国遼寧省朝陽市健平県の夏家店下層文化の水泉遺跡から発掘され、朝陽市博物館に所蔵されている、骨製の薄板状の口琴 2 例と半完成品 1 例については、[12, 13, 84] として 2 回にわたり検証してきた（直川 2017: 57-59、2022: 36）が、もう一例の存在が判明したので、[85] として追加しておく。

陝西省神木の石峁遺跡で発掘された 21 本の薄板状の骨製口琴 [57-79]¹³⁵（直川 2020: 44-47、2022: 37-41）を論じた、発掘調査の責任者である陝西省考古研究院の孫周勇による論文の中で参考的に挙げられているもの（fig.90）で、図版のキャプションでは「水泉遺跡出土の骨口琴」であることが明記されている（孫 2020: 49）。本文中（同: 50）では、この口琴が、遼寧省文物考古研究所の所蔵であること、枠が破損していること、枠の一端が広く、小さな穴が開けられていること、弁の先端が尖っていることが記されている。また、全長 90mm、幅 12mm、厚さ 1mm であり、夏（紀元前 2070 頃～同 1600 頃）から殷（商、紀元前 17 世紀頃から同 1046 年）に相当するもの、とされている。



fig. 90 中国遼寧省水泉遺跡出土の口琴 [85]。孫周勇 2020 より

8a. 中国陝西省 Shaanxi, China [14]（補遺）

陝西省宝鶏市鳳翔県¹³⁶南指揮の奉公一号大墓から出土した、「簧」の文字が書かれた、口琴のケースと考えられる竹筒（紀元前 6 世紀）について、直川 2017: 59-60 では、薄板状の口琴扱いの通し番号 [14] を与えたが、この遺物が竹筒であること以外、その形状や大きさも、中にどのような口琴が入っていたのかも、全く判断の手掛かりになるものがない

いため、薄板状／湾曲状いずれのタイプか不明なものとして扱い、仮に [202] 番¹³⁷を振り、[14] は欠番とする¹³⁸。

11a. ロシア連邦、カマ川流域 Prikamye, Russia [17～51, 86～88] (補遺)

ロシア連邦のタタルスタン共和国、バシコルトスタン共和国、キーロフ州、ウドムルト共和国、ペルミ地方にまたがる広大なカマ川流域地域で、金属製 26 例・骨や角製のもの 9 例など、膨大な数の、引き紐の穴のない（おそらく杵を弾いて演奏するタイプの）薄板状の口琴や、口琴の断片が発掘されていることはすでに述べた（直川 2017: 64-65）が、それぞれの発掘例について、出典であるイヴァノフ、ゴルブコーヴァ（Иванов, Годубкова 1997）に従い、ごく簡単に記述しておく。同資料に図版の無いものは、二人の著者が根拠とする原典に極力あたり、図版が見つかったものは紹介する。さらに、この作業の結果、「引き紐のための穴が杵にあげられている」と積極的に考えられる例は、別扱い（後述 28.）とする。また、新たに同地域から発掘された、いくつかの口琴の追加情報も最後に記す。

以下、イヴァノフ、ゴルブコーヴァ 1997 に従って順に並べる。同資料 p. 102-106 にある番号は、< igNo.1 > などと記す。この資料では、ひとつの番号の中で複数の口琴を論じている場合があり、そのようなときには、登場順に < igNo.1-1 > などとする。また同資料に掲げられている、発掘口琴のほとんどの例を並べた二つの図版は、オリジナルの番号がついたまますでに紹介してある（直川 2017: 64 fig. 26、同: 65 fig. 27）ので、この図版との照合のために、(fig. 26-1) などとイタリックでオリジナル図版中の口琴番号を記す。

[17] < igNo.1-1 > (fig. 26-6 および fig. 91 下) タタルスタン共和国、タンケエフ墳墓 Танкеевский могильник、紀元後 9～10 世紀。ヴォルガブルガリア文化初期。裕福な女性の墓より出土（Казakov 1977: 107）。青銅。完品に近いが、破損しており、杵の一部が失われている。イヴァノフ、ゴルブコーヴァによる採寸は、(a) 全長 61mm、(b) 弁の根元側の杵の幅 8mm、(c) 弁の先側の杵の幅 6mm、(d) 弁の根元から杵の端までの距離 5mm、(e) 弁が切り出された先端側の穴の端から、杵のもう一方の端までの距離 16mm、(f) 弁長 31mm、(g) 厚さ 0.6mm、(h) 紐を通すための穴なし。タタルスタン科学アカデミー歴史研究所蔵。

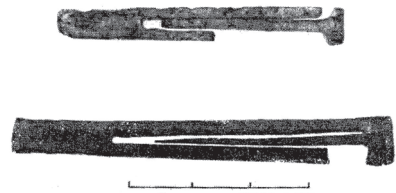


fig. 91 ロシア連邦タタルスタン共和国タンケエフ墳墓出土の口琴。下から [17][18]。カザコフ 1977 より。図版はオリジナルのまま、180 度回転させてはいない。

[18] < igNo.1-2 > (fig. 26-16 および fig. 91 上) 同上のタンケエフ墳墓の第 68 墓（裕福な女性の墓）、右大腿骨付近より出土。青銅。破損、杵の一部欠。(a)49mm、(b)7mm、(c)4mm、(d)4mm、(e)14.3mm、(f)27.7mm、(g)0.6mm、(h)なし。所蔵同上。

[19] < igNo.2 > (fig. なし) タタルスタン共和国、ビリャル Биляр。タンケエフ墳墓。紀元後 10～13 世紀。ヴォルガ・ブルガリア文化。金属。採寸なし。長方形の杵。「モンゴル人の到来以前の遺物」。所在の記載なし。

[20] < igNo.3 > (fig. なし) タタルスタン共和国、ウスチ-ブルィスキン墳墓 Усть-Брыскинский могильник。紀元後 3～5 世紀。アゼリンスカヤ文化。女性の墓より出土。銅。採寸なし。弁の根元側に穴。1974 年スターロスチンによる発掘。タタルスタン科学アカデミー歴史研究所蔵。(記述では、「弁の根元側の穴」が、杵に開いているのか、その場合弁からの距離がどのくらいの位置に開いているのか、はたまた弁に開いているのか、という点が不明確な上に、図版が現時点では確認できないので、一応この項で扱うが、もしかしたら、後述 28.として新設する、カマ川流域の、引き紐の付いた口琴の仲間に入れなおす必要が生じるかもしれない。)

[21] < igNo.4 > (fig. 26-20¹³⁹) キーロフ州、ユム墳墓 Юмский могильник。紀元後 10 世紀。古代マリ人か。男女不明の墓より出土。青銅。振動弁の先端側の杵の残欠。幅 9mm、厚さ 1mm 未満 (図中のスケールに基づく直川の計測では、全長約 34.7mm、幅約 6.8mm、厚さを表す図が無いため計測できず不明)。1957 年出土。所在の記載なし。

[22] < igNo.5-1 > (fig. 26-2) ウドムルト共和国、イドナカル Иднакар 土壘。紀元後 9 世紀終わり～13 世紀。チェペツカヤ文化。青銅。完品。(a)? (採寸不明)、(b)7.2mm、(c)?、(d)2.2mm、(e)?、(f)?、(g)0.3mm、(h)? (直川計測で全長約 68mm、幅約 10.3mm、厚さ不明、紐穴なし)¹⁴⁰。1974～1992 年のイヴァノーヴァによる調査で発見。ウドムルト歴史・言語・文学研究所蔵。所蔵番号 ИК-76/4973。

[23] < igNo.5-2 > (fig. 26-8) 同上。青銅。振動弁の根元側の残欠。(a)?、(b)?、(c)8mm、(d)?、(e)10.2mm、(f)?、(g)0.3mm、(h)? (直川計測で全長約 30.3mm、幅約 8.5mm、厚さ不明、紐穴なし)。調査年代、所蔵施設情報同上。所蔵番号 ИК-76-4936。

[24] < igNo.5-3 > (fig. 26-15) 同上。青銅。振動弁の先端側の杵の残欠。(a)?、(b)?、(c)5mm、(d)?、(e)18.2mm、(f)?、(g)0.4mm、(h)? (直川計測で全長約 30.3mm、幅約 8.5mm、厚さ不明、紐穴の有無不明¹⁴¹)。調査年代、所蔵施設情報同上。所蔵番号 225/359。

[25] < igNo.5-4 > (fig. 26-21)。同上。青銅。振動弁の先端側の杵の残欠。(a)?、(b)?、(c)10.5mm、(d)?、(e)12.2mm、(f)?、(g)0.3mm、(h)? (直川計測で全長約 47.8mm、幅約 11.7mm、厚さ不明、紐穴の有無不明)。調査年代、所蔵施設情報同上。所蔵番号 251/154。

[26] < igNo.5-5 > (イヴァノーフ、ゴルブコーヴァ 1997 には fig. なし。fig. 92 参照) ウドムルト共和国、イドナカル墳墓。紀元後 11 世紀から 13 世紀。チェペツカヤ文化。二つの 11～13 世紀の城壁の間より出土。青銅。完品。(a)66mm、(b)8.7mm、(c)10mm、(d)4.5mm、(e)12mm、(f)49mm、(g)0.6mm、(h)なし。(直川計測で全長約 65.5mm、幅約 10.1mm、厚さ不明、紐穴なし。弁が杵の中央に切り出されておらず、ずれている。) 1989～1992 年のイヴァノーヴァによる調査で発見。ウドムルト歴史・言語・文学研究所蔵。所蔵番号 270/44。

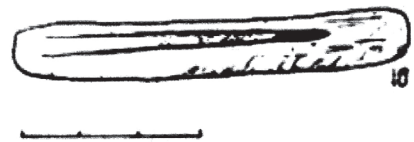


fig. 92 ロシア連邦ウドムルト共和国イドナカル土壘出土の口琴 [26]。イヴァノーヴァ 1995 より。図版はオリジナルのままで、180 度回転させてはいない。

[27] < igNo.6-1 > (fig. 26-5) ウドムルト共和国、紀元後 8 世紀終盤～10 世紀にかけてのムィドラニシャイ墳墓 могильник Мыдланьшай。ポロム文化。青銅。9～10 世紀の墳墓群の 3 つの墓から、[27, 28, 29] の 3 本が出土。どれも全長 70～80mm、厚さ

1mm未満(詳細な採寸はなし)。墓の時代は紀元後9～10世紀。ウドムルト郷土誌博物館蔵。[27]は第8墓、10代の少女の右肩付近に発見。死後の世界での必需品のひとつとして副葬されたもの。(直川計測で全長約66mm、幅約5.6mm、厚さ不明、紐穴なし。ほぼ完品だが、振動弁の根元側の枠が一部欠けている。)

[28] < igNo.6-2 > (fig. 26-18) 同遺跡の第69墓より出土。多くの装飾品のある、女の子の墓で、胸の上から発見。死後の世界での必需品のひとつとして副葬されたもの。青銅。(直川計測で全長約55.6mm、最大幅約8.1mm、最小幅約6.2mm、厚さ不明、紐穴なし。完品。)

[29] < igNo.6-3 > (fig. 26-19) 盗掘跡のある第84墓より出土。55～60歳前後の男性の墓。左足の近くに発見。青銅。(振動弁の先端側の枠の残欠。直川計測で全長約48.8mm、幅約5.9mm、厚さ不明、紐穴の有無不明。)

[30] < igNo.7-1 > (fig. なし) ウドムルト共和国、カチカシユル墳墓 Качкашурский могильник、紀元後9～13世紀。チェペツク文化。1967年の発掘調査でコンドラーチエフによって発見された。詳細不明。

[31] < igNo.7-2 > (fig. 26-1) 同じくカチカシユル墳墓の、1988年の調査で第36墓(紀元後11-12世紀の若い女性または少女の墓)より出土、右膝の近くで発見された。銅。完品。(a)69.6mm、(b)7.1mm、(c)7.5mm、(d)3mm、(e)12.7mm、(f)37mm、(g)0.4mm、(h)穴なし。口琴の下には、70×80mmの木製の板状の、口琴のケースが発見された。ウドムルト歴史・言語・文学研究所蔵。

[32] < igNo.7-3 > (fig. 26-10) 同上、第78墓(紀元後9～10世紀の若い女性または少女の墓)の、右側のベルトの位置より出土。青銅。弁の付け根側の枠の一部と弁の一部のみで、他の部分は半分以上失われている。(a)?、(b)6.3mm、(c)?、(d)2.8mm、(e)?、(f)?、(g)0.2mm、(h)?(直川計測で、残存部の全長約21.5mm、最大幅約7mm、厚さ不明、穴なし)。所蔵同上。

[33] < igNo.8 > (fig. 26-13) ウドムルト共和国、オムトニツァ墳墓 Омутницкий могильник。紀元後9～13世紀、チェペツク文化。第17墓(紀元後10～11世紀の女性の墓)の頭蓋骨の右側で発見。青銅。弁の先端側の枠の残欠。(a)?、(b)?、(c)3.8mm、(d)?、(e)17mm、(f)?、(g)0.4mm、(h)?(直川計測で、残存部の全長約20.3mm、最大幅約5.8mm、厚さ不明、紐穴の有無不明)。所蔵同上。

[34] < igNo.9 > (fig. 26-17) ペルミ地方、プリヨソ村のポロムIII遺跡 Поломское III。紀元後7～10世紀のポロム文化。1906年のタラーソフの調査により発見された、青銅の口琴の断片2点。(a)48mm?、(b)5.3mm、(c)5mm、(d)9.8mm、(e)19.5mm、(f)?、(g)0.4mm、(h)穴あり。(直川計測で、断片2点をつなげた時の全長約47.5mm、最大幅約5.9mm、厚さ不明。枠に穴らしきものが2つ確認できるが、その位置が弁のあるべき位置から遠く、弁の起振に関わる引き紐のためのものとは考えにくい。また、この2点か、一体のものであるのかどうかは何とも言えない。)エルミタージュ美術館蔵(N 616/670)。

[35] < igNo.10-1 > (fig. 26-11) ウドムルト共和国ポロム村のポロムI墳墓 Поломский I могильник。紀元後6～10世紀のポロム文化。1906～07年の調査により、3点の青銅の口琴とその残欠[35～37]が発見された。[35]は口琴の振動弁の先端側の枠の断片で、青銅製、第6墓より出土。同じ墓から出た遺物により、紀元後8～9世紀の

女性の墓と考えられる。(a)?、(b)?、(c)4mm、(d)?、(e)22mm、(f)?、(g)0.5mm、(h) 穴あり。(直川計測で、残存部の全長約 46.3mm、最大幅約 5.3mm、厚さ不明。枠に穴らしきものが確認できるが、その位置が弁のあるべき位置から遠く、弁の起振に関わる引き紐のためのものとは考えにくい。) エルミタージュ美術館蔵 (N 606/1099)。

[36] < igNo.10-2 > (fig. 26-3) 同上の遺跡の第 125 墓(紀元後 8～9 世紀の女性の墓)より出土。青銅。完品。(a)64mm、(b)5mm、(c)5mm、(d)4mm、(e)15mm、(f)38.5mm、(g)0.2mm、(h) 穴なし(直川計測で、全長約 64.5mm、最大幅約 6.6mm、厚さ不明)。クンストカーメラ蔵 (N 1384/617)。

[37] < igNo.10-3 > (fig. 26-4) 同上の遺跡の第 131 墓(紀元後 9～10 世紀の女性の墓)より出土。青銅。完品。(a)63mm、(b)4.3mm、(c)6.7mm、(d)4mm、(e)17mm、(f)42mm、(g)0.3mm、(h) 穴なし(直川計測で、全長約 65.4mm、最大幅約 6.5mm、厚さ不明)。所蔵同上 (N 1384/700)。

[38] < igNo.11 > (fig. 26-22) ウドムルト共和国ポロム村のポロム II 墳墓 Поломский II могильник。紀元後 8～10 世紀のポロム文化。1960 年の調査で、第 70 墓(8 世紀末～9 世紀の、裕福な少女の墓)より出土。青銅。完品。(a)59mm、(b)5.8mm、(c)5.5mm、(d)5mm、(e)11.5mm、(f)40.5mm、(g)0.4mm、(h) 穴なし(直川計測で、全長約 62mm、最大幅約 6.7mm、厚さ不明)。ウドムルト郷土誌博物館蔵。

[39] < igNo.12 > (fig. 26-14) ウドムルト共和国トリヨン墳墓 Толенский могильник。紀元後 8～10 世紀のポロム文化。第 98 墓(9～10 世紀の女性の墓)の、腰のあたりから出土。青銅。枠の残欠で、刃物による刻みの痕跡が見られる。(a)?、(b)?、(c)4mm、(d)?、(e)17.8mm、(f)?、(g)0.5mm、(h)?(直川計測で、残存部の全長約 19.8mm、最大幅約 6mm、厚さ不明)。所蔵同上。(イヴァノフ、ゴルブコーヴァ 1997 では弁の先端側の枠の残欠として扱われている。刃物の跡は、弁の切り出しに関わるものと思われる。)

[40] < igNo.13-1 > (fig. 27-1) ウドムルト共和国トリヨン I 居留地 Толенское I селище。紀元後 8～10 世紀のポロム文化。1984 年セミョーフ発掘。骨。弁の先端側の枠の残欠。採寸の記載なし(直川計測で、残存部の全長約 25.9mm、最大幅約 7mm、厚さ約 1.1mm)。ウドムルト歴史・言語・文学研究所蔵。

[41] < igNo.13-2 > (fig. 27-3) 同上の遺跡からの、1986 年のセミョーフによる発掘。骨製の、製作過程途中の物の破片。振動弁を切り出すスジが見られる。採寸の記載なし(直川計測で、残存部の全長約 30.7mm、最大幅約 5.8mm、厚さ約 2.2mm)。所蔵同上。

[42] < igNo.14 > (fig. 26-12) ウドムルト共和国ヴァルニン墳墓 Варнинский могильник。紀元後 5 世紀末～10 世紀のポロム文化。1984 年セミョーフ発掘。第 299 墓(紀元後 9～10 世紀初頭の女性の墓)から、ペンダント・銅ビーズ・耳かきなどとともに、胸飾りの一部として出土。青銅。弁の先端側の枠の残欠。(a)?、(b)?、(c)5.5mm、(d)?、(e)20mm、(f)?、(g)0.5mm、(h)?(直川計測で、残存部の全長約 30.7mm、最大幅約 5.8mm、厚さ不明)。ウドムルト歴史・言語・文学研究所蔵。

[43] < igNo.15 > (fig. 27-2) この遺物が、弾くタイプではなく、枠に取り付けられた紐を引いて弁を振動させるタイプの口琴である可能性については、既に述べた(直川 2017: 65)。今回、同地域からの出土品の中に、紐口琴の例が他にも存在することが判明し

たので、後述 28. で [44, 45] とともに別扱いとしたい。

[46] < igNo.17 > (fig. 26-9) ペルミ地方、上サヤ墳墓 Верх-Саинский могильник。紀元後 6～8 世紀のネヴォラ（ネヴォリンスカヤ）文化。第 16 墓（おそらく女性の墓）から出土。青銅。弁の先端側の杵の残欠。振動弁と、振動弁の付け根側の杵は失われている。採寸の記載なし（直川計測で、残存部の全長約 41.3mm、最大幅約 8.1mm、厚さ不明）。国立ウドムルト大学蔵。

[47] < igNo.18-1 > (fig. 27-4) ペルミ地方クングル地区、ポドカーメンノエ土壘 Подкаменное городище。紀元後 8 世紀のネヴォラ（ネヴォリンスカヤ）文化。1978 年の発掘調査で、4 例の骨製の口琴の残欠 [47～50] を発見。およそ幅 11-14mm、厚さ 1-2mm 程度であるとされ、これ以上の採寸の記載はない。弁の根元側の杵の残欠（直川計測で、残存部の全長約 40.3mm、最大幅約 11.7mm、厚さ不明）。

[48] < igNo.18-2 > (fig. 27-5) 弁の先端側の杵の残欠（直川計測で、残存部の全長約 43.2mm、最大幅約 17.3mm、厚さ不明）。

[49] < igNo.18-3 > (fig. 27-6) 杵の残欠。中央付近で二つに折れており、杵の一部と、弁は失われている（直川計測で、残存部を繋ぎ合わせた場合の全長約 100.2mm、最大幅約 14.7mm、厚さ不明）。

[50] < igNo.18-4 > (fig. 27-7) 杵の残欠。杵の一部と、弁は失われている。中央付近で二つに折れているのを、繋いでであるように見える（直川計測で、残存部の全長約 123mm、最大幅約 15.3mm、厚さ不明）。

以上 4 例ともにクングル郷土誌博物館蔵。なお、[47, 49, 50] には弁の根元側の杵の、弁からはかなり離れた位置に比較的大きめの穴が認められるが、その位置から、弁の起振に関係するものではないと考えられる。この穴の用途の可能性については、直川 2017: 65 参照。

なお、< igNo.19 > (fig. 26-7) は、バシコルトスタンのイデルバエヴォ古墳群で出土した青銅あるいは銅の口琴 [16] で、10. (直川 2017: 61-63) で詳述してあるので省略する。

[51] イヴァノーフ、ゴルブコーヴァに記載のない、ペルミ地方で出土したこの口琴については、直川 2017: 64, 67 では、その存在に触れたのみであったが、本稿で写真 (fig. 93) とともに簡単に紹介する。情報は、ベスクローヴヌイ (Beskrovny 2013) による。

ペルミ地方、ドブリャンカ市ボヤノフ墳墓 Бояновский могильник。紀元後 10 世紀。ロモヴァトフ文化。アンドレイ ダニチの調査により、第 51 墓より出土。青銅。サイズの記載はないが、写真をもとに採寸すると、全長約 60.8mm、幅は、弁の根元側約 6mm、弁の先端側 5.7mm。引き紐の穴も見当たらない。所在情報の記載なし。



fig. 93 ロシア連邦ペルミ地方ボヤノフ墳墓出土の口琴 [51]。ベスクローヴヌイ 2013 より。図版はオリジナルのまま、180度回転させてはいない。

さらに、ウドムルト共和国グラゾフ地区の下ボガティル I 居留地から、2018 年の調査の結果、3 例の骨口琴の破片が発見されている [86～88] ので、情報を確認しておく。

エメリヤーノヴァ (Емельянова 2019) によれば、同地で地球物理学および土壌学的研究が行われた際、紀元後 7～12 世紀の集落から、鉄製品や青銅製品、骨の鏃など 5700 以上の遺物が発見され、その中に発見されたものであるとのこと。

[86] は、口琴の弁の先端側の杵の残欠で、残存部の全長 42mm、幅 8mm、厚さ 1mm。小さな穴があけられている (fig. 94-1) とされる。

[87] は、杵の、比較的原型を保った部分ではあるが、振動弁と、振動弁の根元側の杵の一部が破損して失われている。残存部の全長 74mm、幅 9mm、厚さ 2mm。穴は認められない (fig. 94-3)。

[88] は全長 54mm、幅 3mm、厚さ 2mm の細長い薄板状の物体で、口琴の杵、または弁と考えられるという (fig. 94-2)。

これほど多くの出土例が見られるほど盛んであった、ヨーロッパ地域の薄板状の弾くタイプの口琴文化が、現代の民族例としては全く受け継がれていないのはなぜなのだろうか。

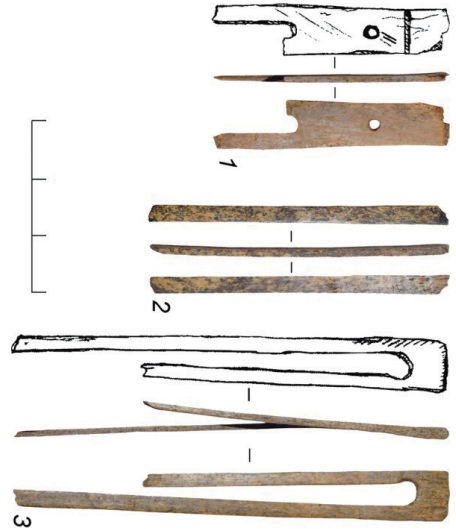


fig. 94 ロシア連邦ウドムルト共和国下ボガトイル I 居留地出土の口琴杵の破片。上から [86] [88] [87]。エメリヤーノヴァ 2019 より。図版は、オリジナルを 90 度右に回転させた。

28. ロシア連邦、カマ川流域 2 Prikamye, Russia 2 [43 ~ 45]

ロシア連邦のカマ川流域 (11, 11a) の中で扱ってきた出土口琴のうち、紐で振動させるタイプのもの、およびその可能性が高いと思われる例を、別扱いとし、新たに設定した本項で記述する。各楽器の概要は、11a の [17～50] に引き続きイヴァノーフ、ゴルブコーヴァ 1997 に基本的に従う。これら薄板状の紐口琴の分布域が、アルタイ共和国にとどまらず、さらに西に延びてウラル山脈を越え、ヨーロッパ側のペルミ地方にまで至っていたことを示す、重要な例であると考えられる。

[43] < igNo.15 > (fig. 27-2) ペルミ地方南西部のチャスティン地区、マホニン土塁 Махонинское городище。紀元前 2～紀元後 3 世紀。グリャデノフスカヤ文化。1960 年の発掘調査で出土。角製。幅約 15mm との記載以外の採寸はない。弁の根元側の杵の残欠で、杵上に穴が観察できる (直川計測で、残存部の全長約 87.2mm、最大幅約 15.7mm、厚さ不明)。

[44, 45] < igNo.16-1, 16-2 > (イヴァノーフ、ゴルブコーヴァ 1997 には fig. なし) 同じくペルミ地方の中央部にあるイリン地区、デメンコヴォ墳墓 Деменковский могильник。紀元後 8～9 世紀のロモヴァトフ文化。1953 年のゲニングによる発掘調査で、骨製の口琴の残欠 [44] と完品 [45] を発見。イヴァノーフ、ゴルブコーヴァでは、完品の [45] には弁の根元側の杵に穴が開いていることが記されているが、それ以上の情報は無い。しかしながら、その出典とされている情報をあたると、図版 (fig. 95) を確

認することができた (Генинг 1964: 111)。ただし文中ではそれほど詳細な説明はなく、二点のうちの一点 (fig. 95-4) が、「編み物のための特殊な道具の一種」とされるに留まっている (ということは、口琴と同定したのは、イヴァノーフとゴルブコーヴァということになるだろうか)。また、遺物の年代は紀元後 9 世紀以降、とされている。

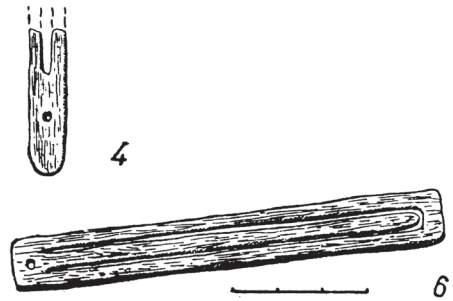


fig. 95 ロシア連邦ペルミ地方デメンコヴォ墳墓出土の口琴杵の残欠 [44] と、破損のない口琴 [45]。ゲニング 1964 より。図版はオリジナルのまま、回転させてはいない。

図版に付されたスケールをもとに採寸すると、振動弁の先端側と考えられる杵の残片 [44] が、全長約 33mm、幅約 8.8mm。完品の [45] は、全長約 97.8mm、幅約 12.4mm で、双方とも厚

さは不明。[44] は弁の先端の延長上の場所に、小さい穴が開けられている。この穴は、弁を振動させる際に、引き紐を引く力に対抗するための輪にした紐を取り付けるための工夫だと考えられないこともない (同様の目的の穴は、アイヌ民族のムックリなどにも見られる)¹⁴²。[45] は、弁の根元側に明らかに「引き紐のための穴」が開けられており、中国陝西省石峁遺跡の出土品をはじめとする、「杵の、振動弁の根元側に穴が開いている」紐口琴の系譜に連なるものであることは間違いない。同タイプの口琴の分布が、ウラル山脈を越えてヨーロッパ地域東端にまで広がっていたことを示す、貴重な証拠である。

12a. ロシア連邦アルタイ共和国 Altai Republic, Russia [52～56] (補遺)

2017 年に発掘された、アルタイの口琴と、その製作途中にあると思われる遺物合計 5 点 (直川 2018: 55-57) について、公式の報告書が刊行されたので、情報を更新しておく。

発掘調査を行ったボロドフスキイによれば、出土口琴の年代は、紀元前 3 世紀～紀元後 6 世紀である (Бородовский 2017: 281) とされているので、本稿でもこれに従う。また、各遺物のサイズも明記されているので、書き留めておく。

最も原型を保ったチェレムシャーンカ土壘出土の [52] (直川 2018: 56, fig. 28 および 29-4) は、全長 110cm、幅 15mm¹⁴³、厚さ 2mm。

同じくチェレムシャーンカ土壘出土の、口琴杵の断片と推定されるもの [53] (fig. 29-5) は、全長 85mm、幅 4mm、厚さ 1～2mm。

チュルトコーフ遺跡から出土した、口琴の素材および製作途中段階と考えられる遺物は、それぞれ [54] 全長 129mm、最大幅 15mm、最小幅 8mm、厚さ 2～3mm。[55] 全長 120mm、幅 8mm、厚さ 1～2mm。[56] 全長 72mm、幅 15mm、厚さ 1mm。

16b. 中国陝西省 2 Shaanxi, China 2 [57～79] (補遺)

石峁遺跡で発掘された 21 例の骨製の薄板状の口琴群のうち、fig. 43 (直川 2020: 45)

左列上から3番目の、振動弁の根元側にくびれを持つ口琴の残欠（杵の片側すべてともう片側の一部、そして振動弁の一部が失われている）について、番号を振り忘れていたので、[70]を与えておく。直川 2022: 40、1～3行目の内容は、「上記に含まれない口琴の杵の残欠が5例見える。これらを仮に[66～70]としておく（左列上から、[62][63][70][66][67]、右列上から[68][60][61][69]となる）」に変更する。

関連して、fig. 42 と 43（直川 2020: 45）のキャプション中の表記「中国社会科学研究院」を「中国社会科学院文学研究所」に訂正する。

18b. 中国内蒙古自治区 2 Inner Mongolia, China 2 [81]（補遺）

直川 2020: 48 では詳細不明であった、龍頭山遺跡出土の骨製の薄板状の口琴について、サイズと所蔵先が分かったので、書き留めておく。この情報も孫（2020: 50 および 53）によるもので、この口琴は、内蒙古文物考古研究所資料室蔵、全長が 90mm とされている。このサイズをもとに幅を計測すると、最大幅約 15.2mm、最小幅約 8.4mm（厚さは不明）となり、同じ内蒙古の [01] と比べても、大きさに極端な差はなく、長さが 8mm 程度短いだけのものであることが判明した。

19a. ロシア連邦オムスク州 Omsk Oblast, Russia [82, 83]（補遺）

[83] の資料について、直川 2020: 49 ではその出土遺跡を「アクションヴォー-II Аксёново-II 土壘」と誤記していたので、「上アクションヴォー-II Верхнее Аксёново-II 土壘」と訂正する。

また、この資料の実測図（同 fig. 52）を採寸した結果、全長約 114.8mm、最大幅約 14.4mm、厚さ約 2.5mm とする。

第7部のおわりに

今回もまた、これまでに挙げてきた出土口琴の、追加情報のアップデートに終始してしまった。次項では、日本の千葉県と埼玉県で発掘された9世紀末～10世紀の口琴を中心に、これまで扱ってきたアジア各地の湾曲状の口琴の、情報追加と訂正を引き続き行い、さらに、取り上げた発掘例全ての通し番号を見直した上で、アジアおよび隣接地域の発掘口琴のまとめと考察を行う予定である。

註：

134 [10]としたヤマロ-ネネツ自治管区の口琴の年代を「18～19世紀」としたのは、同じ遺跡からの発掘品である仮番号 [11]が見つかったのが「18～19世紀」の層であり、そ

- れと同時代、と仮定したためである(直川 2016: 65)。[11]の年代が変更されるとなると、[10]の年代の見直しも必要となる。
- 135 欠番 [78, 79] を含む。当初の発表(同 2020: 46)では 23 例とされていたため。註 123(直川 2022: 44)も参照のこと。
- 136 2021 年に鳳翔区に改称。
- 137 タイプが不明の物を 200 番台とすることについては、註 110(直川 2021: 35) 参照。
- 138 註 113(直川 2022: 43) 参照。
- 139 原文では (fig. 26 の)「22」だが、「20」が正しいと思われる。
- 140 [22 ~ 25] では、イヴァノフ、ゴルブコーヴァによる採寸と、実測図に基づく直川採寸でかなりずれがある。もしかしたら、所蔵番号を含め、何かの間違ひがあるのかもしれない。
- 141 口琴の枠の残欠で、特に弁の先端側の部位しか存在していない場合は、弁の基部側の枠(あるいは振動弁)に、引き紐を取り付けるための穴が開いていたのかどうかは実際上確認のしようがないが、状況から判断して、積極的にこの穴の存在が認められない場合を除き、カマ川流域の口琴枠の残欠は、紐の無いタイプのものとして取り扱うこととする。
- 142 [44] を「枠に引き紐が取り付けられた紐口琴」であるとす明確な根拠はないが、[45] と同じ遺跡からの出土品である、という状況証拠から判断され得るだろう。敢えていえば、「弁の先端側の枠の穴」の存在も、この判断の補強材料となり得るかも知れないが、同様の穴を持つ残片は他にも存在しており(例えば [40, 47, 86] など)、決定的な根拠とするには問題がある。
- 143 当初は、資料に従った「幅 85mm」という寸法を、明らかに間違ひであることを指摘しつつ挙げざるを得なかった(直川 2018: 55)が、ここで訂正しておく。

参考文献：

Beskrovny, Aksenty.

2013 Jew's Harps in Russian Archaeology (unpublished).

Бородовский, Андрей.

2017 Костяные варганы и их заготовки гунно-сарматского времени на территории Северного Алтая. Проблемы археологии, этнографии, антропологии Сибири и сопредельных территорий, Т. XXIII. Издательство Института археологии и этнографии СО РАН. p. 279-283.

中国科学院考古研究所内蒙古工作队 .

1974 赤峰药王廟、夏家店遺址試掘報告 . 考古学報 . 第一期 . p. 111-144.

Емельянова, Александра.

2019 Находки варганов из Нижнебогатырского I поселения. Историко-культурное наследие народов Урало-Поволжья, Удмуртский институт истории, языка и литературы УдмФИЦ УрО РАН. no. 2 (7). p. 49-54.

Генинг, Владимир.

1964 Деменковский могильник – памятник ломоватовской культуры. Вопросы

археологии Урала. Уральский государственный университет. no. 6. p. 91-162.

Иванов, Александр, Голубкова, А.

1997 Древние варганы Прикамья. Вестн. Удмурт. ун-та. no. 8. p. 93-107.

Иванова, Маргарита.

1995 Городище Иднакар IX-XIII вв.: Материалы исследований территории между валами(1989-1992). Материалы исследований городища Иднакар IX-XIII вв., УИИЯЛ УрО РАН. p. 4-55.

Казаков, Евгений.

1977 Древние язычковые музыкальные инструменты Прикамья и Приуралья. Советская этнография, Наука, no. 1. p. 107-109.

Simpson, St John., Pankova, Svetlana (ed.).

2017 Scythians: Warriors of Ancient Siberia, Thames & Hudson.

Степанова, Екатерина.

2018 «В два раза старше новгородских берестяных грамот», Радио Санкт-Петербургской митрополии “Град Петров”, 2018.9.12
<https://www.grad-petrov.ru/broadcast/v-dva-raza-starshe-novgorodskih-berestyanyh-gramot/> (参照 2022-12-31).

孙, 周勇.

2020 陕西神木石峁遗址出土口簧研究. 文物. 第 764 期. p. 44-53.

直川, 礼緒.

- 2016 アジアの発掘口琴チェックリスト (1): 薄板状の口琴 (1). 伝統と創造 東京音楽大学附属民族音楽研究所研究紀要 . vol. 5. p. 57-70.
- 2017 アジアの発掘口琴チェックリスト (2): 薄板状の口琴 (2). 伝統と創造 東京音楽大学附属民族音楽研究所研究紀要 . vol. 6. p. 57-68.
- 2018 アジアの発掘口琴チェックリスト (3): 薄板状の口琴 (3) と湾曲状の口琴 (1). 伝統と創造 東京音楽大学附属民族音楽研究所研究紀要 . vol. 7. p. 55-66.
- 2020 アジアの発掘口琴チェックリスト (4): 薄板状の口琴 (4) と湾曲状の口琴 (2). 伝統と創造 東京音楽大学附属民族音楽研究所研究紀要 . vol. 9. p. 41-56.
- 2021 アジアの発掘口琴チェックリスト (5): 薄板状の口琴 (3). 伝統と創造 東京音楽大学附属民族音楽研究所研究紀要 . vol. 10. p. 23-37.
- 2022 アジアの発掘口琴チェックリスト (6): 薄板状の口琴 (5) と湾曲状の口琴 (4). 伝統と創造 東京音楽大学附属民族音楽研究所研究紀要 . vol. 11. p. 35-46.

In this seventh part of the successive articles, section 6a discusses the lamellate Jew's harps from Yamalo-Nenets Autonomous Okrug, Russia, which is a second example of the excavated Jew's harp that has a "shouldered" tongue (4-9th centuries AD). In sections 7b and 11a, it gives the new information on the lamellate Jew's harps from Liaoning Province, China (16-10th centuries BC) and Udmurt Republic, Russia (7-12th centuries AD). Besides, information of each object from the Kama River basin area is briefly described in section 11a, and several figures are added according to the deeper sources. Several lamellate Jew's harps with a hole for the pulling string found from the concerned area are discussed separately in newly established section 28 (2nd century BC-3rd century AD, and 9th century). Also, corrections and additional information are given to the instruments from Inner Mongolia, Mongolia, Tuva, Shaanxi and Altai.

(本学付属民族音楽研究所共同研究員、日本口琴協会代表)